

三島駅前再開発がスタート

200室ホテル 五輪前に

三島市は31日、東京急行電鉄と三島駅南口に広域観光交流拠点を整備する基本協定書を結んだ。東急は16階建て、約200室のホテルを建設し、東京五輪直前の2020年4月の開業をめざす。市は伊豆半島と箱根、富士山観光の核と位置付け、市中心部ににぎわい拠点としても期待する。塩漬け状態が20年続いていた駅前の一等地開発が始まる。



市、東急と協定

三島市と三島市土地開発公社は17年夏にも、東急に土地約3400平方メートルを売却する。東急は18年1月にも着工。子会社の東急ホテルズが賃借する形で運営する。総事業費は50億円超とみられる。



観光の拠点、にぎわい期待

ホテルは客室の7割超をツイン(面積約25平方メートル)とファミリータイプ(約60平方メートル)とし、ビジネスホテルとは一線を画した上級感を出す方針だ。

富士山の裾野の広がりまで見られる眺望を売り物とし、上層階には露天風呂を備えた温浴施設や展望レストランをつくる。1〜2階は地元食材を活用した飲食店などを誘致する。

ホテルを建設する駅南口西側の西街区は三島市土地開発公社が1997年に国鉄清算事業団から取得した。市は近隣の民有地との一体開発を想定していたが、地権者の合意を得られず長期間にわたり再開発は進まなかった。

早期のにぎわい創出に向け、西街区については16年に所有地を民間に売却して開発を進める方針

に転換していた。駅南口東側の東街区は高層マンションを核とした健康づくり拠点として、引き続き再開発の方向性を探る。

三島市役所で31日に開いた締結式には、豊岡武士市長と東急の渡辺功専

東急、伊豆への投資強化 回遊性高める

務執行役員らが出席した。豊岡市長は「県東部には例のないシティホテル。都市の品格も高まる」と話し、東急グループが首都圏で三島の情報発信に協力する点にも期待感を示した。

「富士山や湧水、歴史遺産など三島のポテンシャルは大きい」と強調。隣の伊豆市で東京五輪の自転車競技が開催されるが「勝負は五輪後」と述べて、持続力のある集客に向けて市と連携する考えを示した。

東京急行電鉄グループは伊豆への投資を強化している。4月に下田東急ホテル(下田市)を改装

開業するほか、7月に横浜―伊豆急下田で新型観光列車の運転を始める。

地域連携にも積極的に取り組む。1〜2階に5件程度誘致する飲食店や土産店は、箱根西麓三島野菜など地域色を重視した新業態などを想定。地元企業と魅力づくりに取り組むほか、緑が豊富な市立公園、楽寿園との協力も模索する。

人口約11万人の地方都市では異例の上級感を重視した三島駅前のホテルを含めて、伊豆全体に魅力ある集客装置を点在させ、回遊性を高める。

三島駅前のホテルは1泊1万〜1万5000円を想定しており、静岡や浜松市の主要ホテルを上

回る。ビジネス客が見込める新幹線駅前で、シングルームの比率を30%以下とするのは珍しい。東急は外国人観光客に人気がある「東京―京都―大阪」のゴールデンルート上や、大都市圏でホテルを新設する好立地を探していた。三島はルート上にある立地に加え、富士山に近く、わさびや湧水など観光資源が多い点を評価した。客室から富士山を望めるようにして、当面、外国人客比率は約3割を見込む。